

大学図書館における聴覚障害学生の情報認識

Information recognition of the Hearing-impaired Students in University libraries

学籍番号：201421582

氏名：菅野 風花

Fuuka KANNO

障害者差別解消法の制定により、高等教育機関で障害学生支援の動きが活発化しており、大学生活のあらゆる面からの支援が求められている。しかし、授業外支援において聴覚障害学生への支援は比較的少ない。特に、大学図書館は近年のアクティブ・ラーニングの推進により聴覚障害学生への支援の需要が高まってきたと考えられる。しかし、聴覚障害学生の特性上、彼らの認識に沿ったサービス提供は難しいのが現状である。そこで、本研究では昨今の大学図書館における聴覚障害学生の認識を明らかにすることを目的とし、映像・記述実験を行った。

実験では、大学図書館の内部を撮影した映像を実験参加者に見せ、印象に残った事項を実験シートに記述させた。また、実験終了後に記述内容について詳細に尋ねるインタビューを行った。実験は聴覚障害学生 10 名と健聴学生 10 名の合計 20 名を対象とした。

実験の結果より、データ分析および聴覚障害学生と健聴学生の比較から、以下のことが明らかになった。まず、聴覚障害学生は健聴学生よりも多くの視覚情報をインプットしようとし、直感性と即時性を色に、情報取得の効率性を統一性に求める視覚情報認識の特性があることが分かった。また、聴覚情報に関しては会話の声と警告音に特徴が見られた。周囲の会話の声は、聴覚障害学生が会話をする際に相手の声の認識を妨げる。そのため、聴覚障害学生にとって会話可能エリアは、会話のしづらい場所であることが分かった。警告音は聞こえていない実験参加者も多く、その理由は「高い音は聞こえづらい」等の聴覚障害者特有の聴覚認識であった。加えて、聴覚障害学生は「音」がない環境は心理的に利用を窮屈にしていることが分かった。

以上の知見から、現状の大学図書館における聴覚障害学生の情報認識を明らかにすることができた。加えて、明らかになった認識から大学図書館サービスにおける不十分な点や改善点が示唆された。しかし、具体的な改善方法や新たなサービス支援法の検討は行っていないため、今後の課題とし、引き続き検討が必要である。

研究指導教員：宇陀 則彦

副研究指導教員：逸村 裕